

宮崎市
遺跡等詳細分布調査報告書

I

〔江南・大淀川西部地区〕

1984

宮崎市教育委員会

序

江南地区、特に古城町を中心とする地域は宮崎市街地に最も接しておりながら一歩足を踏み入れますと山陵に囲まれた田園地帯を形成していたところでございますが、近年の開発の波はこの地域にも押し寄せ、大型団地（生目台団地）等の造成でその景観を一変しつつあるところでもあります。

昭和58年2月には、北川内町中岡遺跡の緊急発掘調査を行い、弥生時代の上器製作跡が発見され話題を呼んだところでもあります。

こうした、中岡遺跡の発見や開発行為の進展等に鑑みて、その周辺地の埋蔵文化財分布調査を実施することとなりました。

調査では多くの遺跡や遺物を確認することができ、古代遺跡等の分布と地名に称されるように山陵を利用した城跡が多いことが特徴づけられたようにも思われます。

分布地図では、そうした遺跡のほかにも、過去、個々に調査しておりました石仏、石塔調査、祠堂調査等についても補足調査を行い、それらをも含めたものとして作成いたしました。

この報告書が文化財保護の一助となり、関係各位の参考となれば幸いです。

また、調査、整理、報告書作成にあられた各位に謝意を表します。

昭和59年3月31日

宮崎市教育長 町 田 篤

例 言

1. 本書は、昭和58年度に国庫補助を受けて宮崎市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査の報告書である。
2. 調査対象区域は、江南地区を中心としており北は大淀川以内の生目地区を含め、南は八重川より以北としており一部源藤町を含めている。
3. 本調査の主体は、埋蔵文化財の分布調査であり、過去、宮崎市教育委員会で開催している神社、仏閣、城跡、石仏、石塔、祠堂調査に補足調査を加え、それらを含めた分布地図を作成した。
4. 本調査にかかわる埋蔵文化財包蔵地調査カード、石仏、石塔調査カード、祠堂調査カード等、原簿は宮崎市教育委員会に保管している。
5. 調査の組織は次のとおりである。

調査主体	宮崎市教育委員会
調査員	野間重孝 荒武麗子
調査補助員	■■■■ ■■■■
調査整理指導	小田富士雄(北九州市立考古博物館館長)
事務局	宮崎市教育委員会 教育長 町田 篤、教育局長 吉田三男 社会教育課長 緒方美利、同補佐 原田好男

6. 分布調査は、荒武麗子、■■■■ が行い総括を野間重孝が行った。
7. 遺跡等分布地名表の作成にあたっては、アルファベットのAを遺跡及び散布地、Bを古墳Cを窯及び生産跡、Dを城跡等、Eを神社、仏閣(跡)、Fを石仏、石塔、Gを祠(祠堂等)とし、それぞれ遺跡番号を001から始めている。
8. 地名表内に旧番号〇-〇としているのは、全国遺跡地図(文化庁S52、3発行)の番号と一致する。
9. 本調査において掲載した遺跡等のはかに数多くの遺跡等が存在することは十分予想され、今後追加補正されるものである。
10. 本書では、特に本調査実施のきっかけとなった中岡遺跡の発見、発掘調査があり、この地区及びその周辺における重要な参考遺跡となりうるため、関連資料として項目を新たにして

とりあげた。

11. 中岡遺跡出土の弥生土器については、北九州市立考古博物館館長の小田富士雄氏に御指導を受け、また「中岡遺跡の弥生土器」についての御執筆をいただいた。
12. 挿図の実測は、荒武麗子が行い、トレスは野間重孝が行った。
13. 写真撮影、本書の編集は野間重孝が行った。
14. 本書における表採及び中岡遺跡出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。

総目次

I	江南・大淀川西部地区の歴史的環境……………〈野間重孝〉……………	1
II	遺跡等分布地名表……………	4
	1. 遺跡及び散布地〔A-001～058〕……………	4
	2. 古墳〔B-001～018〕……………	6
	3. 窯及び生産跡〔C-001〕……………	6
	4. 城跡〔D-001～014〕……………	6
	5. 神社・仏閣(跡)〔E-001～033〕……………	7
	6. 石仏・石塔〔F-001～104〕……………	8
	7. 祠(祠堂等)〔G-001～036〕……………	12
III	主要遺跡概説……………	13
	1. 曾井遺跡〔A-017〕……………	13
	2. 上ノ原遺跡〔A-022〕……………	13
	3. 椎尻形遺跡〔A-030〕……………	14
	4. 下古城遺跡〔A-009〕……………	14
	5. 上屋敷遺跡〔A-041〕……………	14
	6. 高嶺遺跡〔A-044〕……………	14
	7. 九日田遺跡〔A-040〕……………	14
IV	中岡遺跡……………	17
	1. 中岡遺跡の概要……………〈野間重孝〉……………	17
	2. 中岡遺跡の弥生土器……………〈小田富士雄〉……………	18

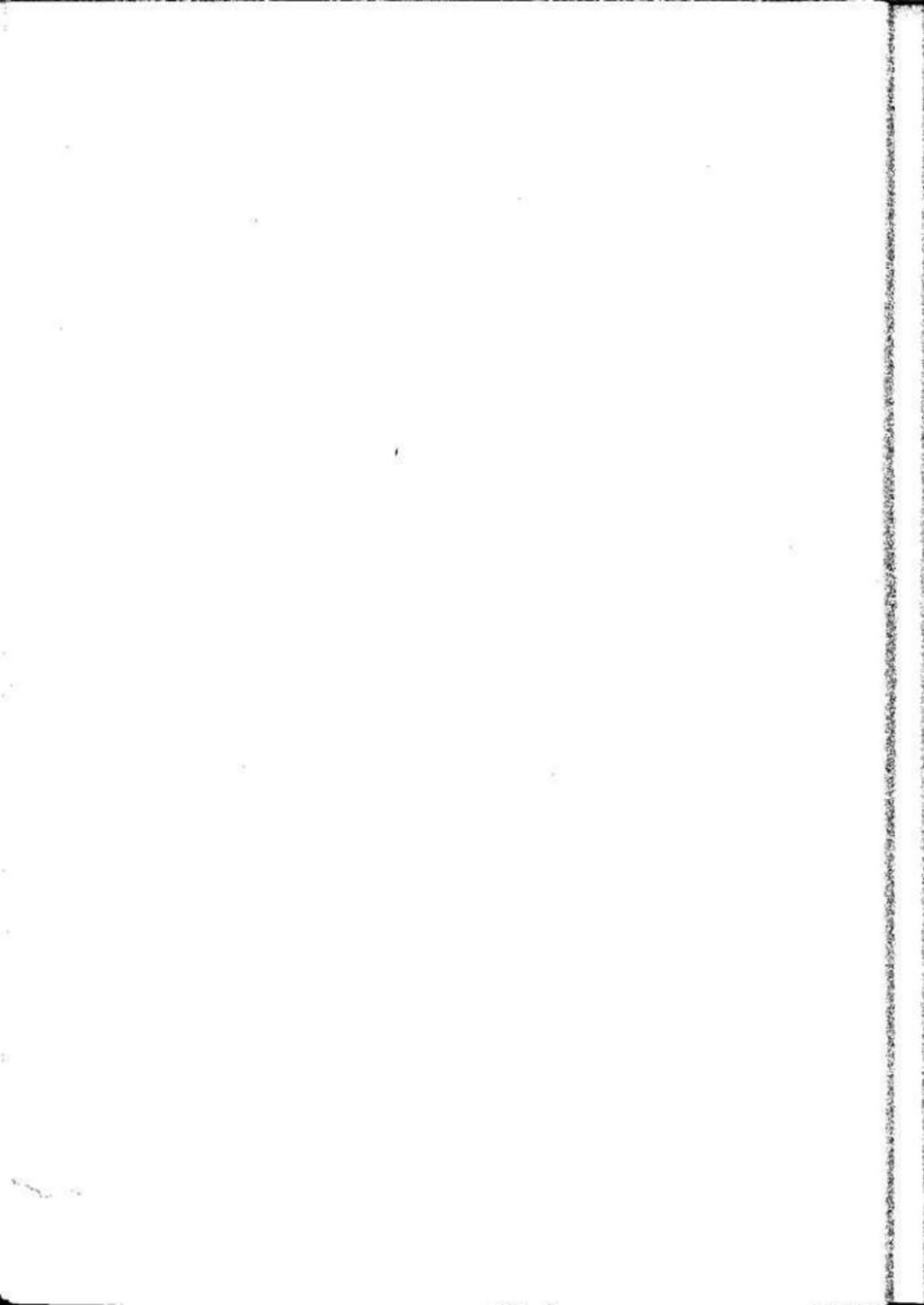
附図 江南・大淀川西部地区遺跡等分布地図

插 圖 目 次

第1圖	表採遺物(曾井遺跡(A-017),上ノ原遺跡(A-022),椎屋形遺跡(A-030))	15
第2圖	表採遺物(下古城遺跡(A-009),上屋敷遺跡(A-041),高塚遺跡(A-044))	16
第3圖	表採遺物(高塚遺跡(A-044),九井田遺跡(A-040))	17
第4圖	中岡遺跡平面圖	18
第5圖	中岡I式土器參考資料	22
第6圖	中岡遺跡出土土器〔5~8区下層土器(1)〕	23
第7圖	中岡遺跡出土土器〔5~8区下層土器(2)〕	24
第8圖	中岡遺跡出土土器〔5~8区上層土器〕	25
第9圖	中岡遺跡出土土器〔9~11区上層土器〕	26
第10圖	中岡遺跡出土土器〔12・13区下層土器〕	27

圖 版 目 次

図版1	表採遺物	28
図版2	中岡遺跡出土土器〔5~8区下層土器(1)〕	29
図版3	中岡遺跡出土土器〔5~8区下層土器(2)〕	30
図版4	中岡遺跡出土土器〔5~8区上層土器〕	31
図版5	中岡遺跡出土土器〔9~11区上層土器〕	32
図版6	中岡遺跡出土土器〔12・13区下層土器〕	33



1 江南・大淀川西部地区の歴史的環境

蛇行する大淀川西部地区は、青井岳山塊から伸び出る丘陵端が宮崎平野（沖積平野）に突き出しており、起伏のある山地を形成している。低地は大淀川によって形成された沖積平野が展開している。起伏のある山陵間には谷間が複雑に入り込む地形を形成しておりそれらに沿って集落が営まれている。特に牛目地区では古墳境からの地名が良く残っており、縄文海進期の名残りと思われる。例えば、〈跡江〉—入江の跡、〈有田〉—大淀川の自然堤防に接して田が存在した、〈浮田〉—沼地が深く田んぼが浮いた状態にあった、〈細江〉—深く細い入江となっていた、〈柏原〉—葦の原が残っていたなど大字地名で残っている。

旧石器時代の遺跡の発見例はないが、恐らく洪積台地のどこかに存在するものと思われる。こちら一帯は火山灰土層の堆積がかなり厚く遺跡や遺物の発見を困難にしているものと思われる。

縄文時代の遺跡も旧石器時代同様に包含層が深く発見例を少なくしているものと思われる。代表的な遺跡としては国指定史跡生目古墳群の集る跡江台地の南端に位置する跡江貝塚（現在消滅）がある。この貝塚からは縄文時代前期の円筒形土器で代表される壺ノ神式土器を出土した遺跡である。そのほか、今回の調査で曾井城跡の北東斜面において縄文時代中期から後期にかかる土器片を採取している。また、椎屋形台地では、過去、山地を10mほど掘削した際に土器片が多量に出土したとのことである。数例の縄文土器採取はあるものの希薄さが感じられる。

弥生時代前期の遺跡は確認されていない。中期あたりの土器も非常に少なく1部跡江台地等の表採資料に見ることができる。特に後期から終末にかけては、その遺跡の数が急に増加してくる。過去、弥生時代の表採土器を散見することができるが、発掘調査によるものは少なく住居跡等の遺構発見例はない。ところが昭和58年2月に宮崎市教育委員会が発掘調査を行った北川内町中間遺跡では、標高30m内外の山腹窪地において土器生産跡を発見している。この遺跡では素材となる粘土山や湧水を溜める井戸跡、土器を焼いた焼成土坑などが検出され、壺を主体として壺や高杯、器台が多量に出土し、復元可能なものは100点を越している。また、土器片は数方点にのぼる状況であった。このことは、弥生時代終末期において土器生産を大々的に行った生産工場を物語るものであって、周辺遺跡へも供給された可能性を秘めているのである。古城地区においては起伏のある山地がとりまいており、平坦面をもつ台地は椎屋形台地に代表されるもので、広面積をもつのは非常に少ない。また、牛目地区においては独立丘陵上の平坦面が個々に存在し、それら台地上では弥生式土器を表採することができ、狭い平坦面での生活が想定されるところであり、大集落を形成したような遺跡の存在は希薄に思われる。

古墳時代になると農耕生活を基盤とする社会構造が成立してきており、生活面も低地における微高地に移動してきている。古城地区には古墳の存在は希薄であり、宮崎河南平野に接する曾井丘陵（曾井城跡）上に曾井古墳（円墳）が存在したことが知られており、その丘陵斜面には横穴が存在していた。赤江地区には、県指定赤江古墳、大塚地区には県指定大淀古墳、牛目地区には国指定生目古墳群と県指定生目古墳が分布しており、前方後円墳、円墳、横穴等数多

くの古墳が築造されている。特に国指定生目古墳群は、跡江台地上に集団化して築造されたものであり、眼下に広がる跡江平野とそれら周辺をも含めた水田に基盤をおいた豪族の存在とその統制を窺うことができる。

歴史時代に入ると荘園制が確立されるようになり、鎌倉時代の建久凶田帳によると古城地区は国富庄(74代鳥羽天皇の皇女である暲子内親王(八条女院)の私有地)の一部にあたる太田(村)の西域に比定されていたと思われる。現在の古城の地名が出現するのは江戸時代以降のことになるようである。太田は、上太田と下太田に分けられていたようであり、上太田が現在の古城地区、下太田が現在の太田地区に相当するようである。建久8年(1187)の「日向凶田帳」(土地台帳)をみると太田100町の田積を有しており、平五という地頭によって管理されていたことを窺い知ることができる。太田100町を包括する国富庄は、八条女院薨去後、春華門院、後鳥羽天皇、後高倉院、安嘉門院、龜山天皇などの皇族に相伝されていたが鎌倉時代の末期には、元弘の乱(1331)の行賞として後醍醐天皇から足利尊氏に与えられている。

南北朝時代になると、荘園の分化が始まり地頭の大名化が進む時代であり、工藤祐経を祖とする伊東氏が伊豆の所領を失って日向に下向するものこの時期である。太田100町を包括する国富庄も分割されるようになり、都城役(北朝方の今川貞世が都城の南朝方北郷氏を攻めた戦争)の功勞として上持、伊東氏が受領し国富庄の私領化、崩壊の時期を迎えることになる。一方浮田の庄にしても分化が行われるようになってくる。こうしたなかで南朝、北朝の戦闘が激化するようになり荘園時代の庄司や地頭が武人化するようになり、名主から大名化へととなってくる。この時代になると山陵を利用した山城が多く築かれるようになり、曾井城(曾井)、蓬米山城(大塚)、跡江城(跡江)などがそれである。

室町時代になると前述したように地頭や庄官達の武人化が1層進み、日向国内では伊東、土持、鳥津の三氏が勢力を延ばしており、三氏はそれぞれに地盤を固めるとともに日向統制をねらって互いに戦闘を繰返すようになり、日向国内は戦乱化していく時代である。伊東、鳥津の戦いの中に右塚の戦いがある。これは鳥津氏久と伊東祐武との戦いであり、鳥津氏が日向国の中央を占領するため応永二年(1396)3月、清武城を攻めたが伊東、土持の連合軍に敗れ、同6年、伊東氏が生目の石塚城に入ろうとしたところ薩摩の兵士らが高寺、高輝の両所に陣取って攻撃したもので、伊東氏はこれを敗って石塚城を手に入れた戦いであった。そのほか、伊東氏と鳥津氏の戦いでは曾井城を中心とする曾井の戦いなどがあり、この時代は、古城、大塚、生目地区とともに伊東、鳥津の戦いの中で盛衰を繰返していたのである。特に古城にある古刹伊満福寺の盛衰にもこのことがかかわっているようである。

安土桃山時代になると伊東氏の既肥城攻めが始まり、永祿11年(1568)には既肥城を鳥津氏から攻略し、伊東三入道義祐のとき伊東48城といわれるように各地の城を支配下に治め伊東氏の全盛期を迎えるのである。しかし、そうした勢力も長続きすることなく、元龜3年(1572)に、えびの市加久藤の木崎原合戦で伊東氏は鳥津氏に大敗し、その後は内部分裂等も起り、衰退の1途をたどり伊東氏の豊後落ちとなるのである。その後、日向一円は鳥津氏の手に入ったのである。そうした鳥津氏の統制も長続きすることなく、豊臣秀吉の九州征伐と国割が行われ

日向は小藩分立となって、延岡藩（高橋氏）、佐土原藩（島津氏）、高鍋藩（秋月氏）、鹿児島藩（島津氏）、飫肥藩（伊東氏）の5藩に分割され、太田村、中村町、大塚村、古城村、源藤村、跡江村、柏原村、長嶺村、細江村、浮田村、生日村、小松村、宮吉村は全て延岡藩、高橋氏の所領となっている。このころから古城、生目地区に多く分布する石仏・石塔が建立されはじめるようである。また、伊東、島津、土持の争乱期に築かれた小規模な山城、出城はその城跡を残すのみとなってくるようである。

江戸時代になると、安上桃山時代に分藩した5藩に幕領を加えて存続していくようになり、藩主もそれぞれ子孫が相次いでいったようであるが、延岡藩と佐土原藩は藩主の交代が行なわれている。江戸時代では大きな争いごとはなく、姿って藩主の年貢のとりたてなどで農民との問題が起るようになり、それらの典型的な例として寛延3年～4年（1750—1年）に、吉村、長峯村、大塚村、瓜生野村、大瀬町村の宮崎郡五ヶ村百姓逃散がある。一方、民衆の民俗信仰、農耕儀礼等が流行するようになり、各地の集落の跡傍や寺、祠等に建立される石仏・石塔の数も急に増加するようになり、特に月天子や月読命等に代表される月侍供養塔（サンヤサマ）、や青面金剛像、猿田彦に代表されるような庚申供養塔（オコシンサマ）、五輪塔、板碑、六地藏石幢などはその例である。また、苔むして群在する石塔を良く荒地の中で見受けるところがあるが、これらは寺跡、祠跡等の信仰の拠点になっていたものと思われる。その他、民衆の信仰のよりどころとなる講、例えば地藏講、観音講、庚申講といった集会所として使用された祠堂の名残りも多く見受けられる。しかし、現在ではほとんどが小さく再建されたものが多く往時の姿は判らないが民衆が信仰に傾注していたことは推測することができる。

今回の調査対象とした地域は、現在開発の波が急速に押し寄せてきている地域であり、特に古城地区などは、数年前までは市街地から1歩足を踏み入れると山陵に囲まれたのどかな田園地帯を醸しだしていたところであった。

II 遺跡等分布地名表

1. 遺跡及び散布地 (A-001 ~ 058)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
A-001		北川内町内野々	散布地	縄文, 弥生, 古墳			たたき石? 調査探している。寺跡?
A-002		"	"	弥生, 古墳			
A-003		"	"	"			
A-004		"	"	"			
A-005		古城町九十田	"	弥生			
A-006		" 山城	"	"			占城川改修工事に伴って消滅している。
A-007	下占城遺跡	" 下占城	"	弥生終末			占城川改修の新川の中より、瓦片などが出土している。
A-008	"	" 和田内	"	弥生			
A-009	"	" 下占城	"	"			
A-010	"	" 馬場田	"	"			湧水あり
A-011	"	" 下占城	"	弥生終末			瓦土のため50cm~1m下げたときに破片出土。
A-012	"	"	"	"			陶磁器
A-013	"	"	"	"			免田式冢の副都破片・陶磁
A-014	"	古城町南川内	"	弥生			
A-015	"	" 占城	"	"			シラス厚土地。シラス層の上の黒褐色土層にみられる。
A-016	"	"	"	"			
A-017	曾井遺跡	大字植久字曾井5642・5643 他	"	縄文	19-117		湧水あり。曾井公民館敷地でも調査されることがある。
A-018	門前遺跡	大字古城町字門前	"	弥生~古墳	19-113		
A-019		北川内町坂谷	"	弥生			岡で谷の一角が崩れているところで、調査した。
A-020		古城町	"	"			
A-021		"	"	"			
A-022	上ノ原遺跡	大字細江字時雨柳田	"	縄文			地元で上ノ原と通称している。
A-023	"	"	"	"			
A-024	"	"	"	"			
A-025	"	"	"	"			
A-026	"	"	"	?			
A-027	"	"	"	古墳			
A-028	"	大字細江字上ノ原	"	弥生終末?			

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
A-029	時雨遺跡	大字細江時雨	散布地		19-109		
A-030	榊屋形遺跡	大字細江字榊屋形	"	縄文, 弥生			
A-031	"	"	"	弥生	19-108		
A-032	"	"	"	上師			
A-033	ツブノキ 榊木遺跡	大字細江字榊木	"	"			
A-034	"	"	"	"			耕作の際、産卵など、大きな破片が、当てられている。
A-035	"	"	"	?			細かい破片が多い。縄文らしいものもある。
A-036	"	大字細江	"	上師			通称: ウエンヤシキ。
A-037	"	"	"	"			
A-038	"	大字長嶺寺ノ下	"	"			丘陵の2分の1は消滅している。
A-039	"	大字長嶺寺若井口	"	弥生			石鏝、磨石?も表採されている。
A-040	九日田遺跡	大字長嶺寺九日田	"	弥生, 古墳			
A-041	上屋敷遺跡	大字浮田字上屋敷	"	弥生	19-66		昭和初期にまつかった遺物は、恐らく保存されているとのこと。
A-042	"	大字浮田	"	古墳 他			
A-043	"	"	"	古墳			
A-044	高塚遺跡	" 高塚	"	弥生終末 鎌倉?			野木圃の造成のとき、この丘陵を削っている。が、土はたらし。
A-045	"	大字生日	"	縄文, 弥生			生日台の北西側、流れてみか?
A-046	木香寺遺跡	大字生日字前田	"	上師			中跡。産卵産卵のとき、大きい破片(須磨器?)が出た。
A-047	"	大字小松	"	弥生, 古墳			微高地
A-048	多宝寺遺跡	大字町字六ツ合	"	弥生	19-72		六合遺跡
A-049	"	" 字原	"	土師			大塚古墳4号周辺
A-050	中国遺跡	源藤町中国	"	弥生	19-118		
A-051	津屋原遺跡	田吉津屋原	"	"	19-122		
A-052	内野々第I遺跡	北川内内野々	"	縄文~平安		生日台住宅閉地 計画区域内地理文 化財等調査報告書	消滅
A-053	内野々第II遺跡	"	"	"			"
A-054	跡江具塚	生日跡江	具 塚	縄文	19-68		
A-055	跡江遺跡	"	散布地	弥生	19-69		
A-056	"	古城岡山ノ城	"	"	19-112		
A-057	細江遺跡	大字細江	"	"	19-107		
A-058	津和田遺跡	大字本郷北方字 津和田	"	弥生			

2. 古墳 (B-001 ~ 018)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
B-001	大淀古墳 1	大塚町字西原 1320	前方後門 墳	古墳			県指定、前方部が削られ、 内溝で指定されている。
B-002	" 2	" 1249	円墳	"			県指定
B-003	" 3	大塚町字時宗 1705	前方後門 墳	"			"
B-004	" 4	大塚町字原1672	円墳	"			"
B-005	" 6	大塚町字宮川 2873	"	"			"
B-006	" 7	大塚町字迫田 258	横穴	"			県指定、通称迫田横 穴
B-007	赤江古墳 1	恒久 2丁目 16-4	円墳	"			県指定、2基のうち1 基は消滅している。
B-008	天神山横穴	大淀天神山	横穴	"	19-114		
B-009	曾井横穴	恒久曾井5642	"	"			
B-010	生目村古墳 1~7	大字浮田 2683の3	"	"			県指定、通称鳥籠横穴、本 指定のもの3基を含む。
B-011	" 8・10	" 1932 2962	"	"			県指定、通称佃前横 穴
B-012	" 19	大字浮田 3264	"	"			県指定、通称照明院 横穴
B-013	" 12	大字富士 4842の1	"	"			県指定、通称山下横 穴
B-014	" 13	" 6407	"	"			県指定、通称岩穴の 前横穴
B-015	" 15	大字細江 170	円墳	"			県指定、墳丘に五輪 塔が3基ある。
B-016	" 17	" 240	"	"			県指定、墳丘はなく、古墳 の跡だけ残っている。
B-017	" 18	大字長嶺 753	"	"			県指定、石塔がいくつか ある、内溝ではない。
B-018	生目古墳群	大字浮田江尻他	前方後門 墳他	"			国指定史跡

3. 窯及び生産遺跡 (C-001)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
C-001	中間遺跡	北川内町中岡	土器焼成 跡	弥生			昭和57年度に発掘調査が 実施されている。

4. 城跡等 (D-001 ~ 014)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
D-001	古城	宮崎市古城町	城跡	天文年間 (1532~55)		日向地誌	
D-002	曾井城	宮崎市恒久	"	天授 (1375~81)		日向記、 日向地誌	
D-003	城跡	大字浮田字古城	"				

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
D-004	石塚城(ノ丸)	大字生目字柏原	城跡	応永		日向記・日向地	
D-005	"(本城)	大字生目	"	"		"	現、生目小学校敷地
D-006	城跡	大字浮州字上屋敷	"				
D-007	高輝城	浮田高輝	"	応永8年(1401)		日向地誌	
D-008	蓬美山城	宮崎市大塚町	"	永徳年間(1381~84)		日向地誌、延慶鑑	長久寺
D-009	白糸城(?)	" 大字有田	"				
D-010	山城	北川内町山城	"	大文年間(1532~55)		日向記 日向地誌	
D-011	本城	古城町時雨	"	天文年間		"	
D-012	城跡(山城)	大字長嶺寺ノ下	"				
D-013	宮ノ城	細江字宮田	"	永享年間(1429~41)		日向記 日向地誌	金宮神社
D-014	園城	大字細江	"				

5. 神社・仏閣(跡)(E-001~032)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
E-001	生目神社	生目小字亀ヶ山	品陀和慶命ほか5柱	不詳		宮崎市史(下)	
E-002	浮田神社	浮田	大名牟知命ほか4柱	"			
E-003	細江神社	大字細江3,879	足仲彦命ほか2柱	応永8年		"	
E-004	金宮神社	細江字宮田	金山彦命ほか5柱	永正18年(1521)			
E-005	長嶺神社	長嶺	品陀和成命ほか1柱	永禄2年社殿再興		宮崎市史(下)	
E-006	富吉神社	大字富吉4,898の1	足長足姫命ほか2柱	文安4年		"	
E-007	白髭神社	有田	猿田彦尊ほか4柱	明治以前の創建		"	
E-008	柏原神社	柏原	品陀和慶命ほか2柱	正和4年		"	
E-009	跡江神社	跡江小字馬場	豊愛聖大神ほか3柱	寛元4年		"	
E-010	若宮神社	大字小松905の1	大鷲命	明治の初め		"	
E-011	小松神社	小松字池田	天照尊大神ほか2柱	不詳		"	
E-012	大塚神社	大塚町1,596	応神天皇ほか	明治以前の創建			
E-013	宮崎大満宮	大満2丁目		建久年間再建			
E-014	古城神社	古城町3,861		明治以前の創建			
E-015	八坂神社	長久2,946		創建不詳大保12年改修			

遊 跡 番 号	名 称	所 在 地	種 別 (祭神・宗派)	時 代	旧番号	文 献	備 考
E-016	恒久神社	恒久582	産土神	寛治4年銀座			
E-017	八手神社	田立6046		不詳			
E-018	正覚寺	大字富吉2736	真宗	明治34年創立			
E-019	本勝寺	大字浮田437	法華宗	不詳			
E-020	末香寺址	生日塚元	"	明治3年廃寺			
E-021	松元寺址	細江坪根		宝永の頃創建、明治3年廃寺			
E-022	霧島寺址	跡江	禅宗	明治3年廃寺			
E-023	伊満福寺	古城町門前6695	真言宗知根院末	平安時代		宮崎市史(上)	
E-024	唯専寺	中村西2丁目3の22	真言大谷派	昭和22年			
E-025	妙経寺	谷川2丁目152	法華宗	昭和21年			
E-026	松崎寺	大字田吉4929	真言宗	貞享2年(1685)			
E-027	長久寺	大塚町城ノ下2825	高野山智山派	創立不詳			
E-028	通照寺	太田2丁目1-19	真言宗	昭和25年に寺号			
E-029	善徳寺	波川2丁目51	曹洞宗	康正元年			
E-030	多宝寺	大塚町六ツ合686	"	享徳元年			
E-031	真光寺	中村東1丁目6-6	浄土真宗	天明年間			
E-032	宝泉寺	大字恒久271	浄土真宗	宝暦11年(1761)			

6. 石仏石塔 (F-001 ~ 104)

遊 跡 番 号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	備 考
F-001	(大迫石塔群)	宮崎市大迫	板碑他	江戸時代初期	板碑(1基)、五輪塔(2基)、地藏殿(1基)、及石仏(1基)、角柱塔(10基)、和縁塔(1基)、不明(1基)。
F-002	町石	古城町下古城	角柱型	文化5年(1808)	角柱型(1基)、石碑型水神塔(1基)
F-003	月待供養塔	古城町古城	月天子	明和6年(1769)	月天子(1基)、水神塔(1基)
F-004	水神塔	古城町	石碑型	文政11年(1828)	
F-005	馬頭観世音	"	像型他		毘沙門天
F-006	庚申塔	"山城	石碑型		水神塔(1基)庚申塔(5基)、道祖神(1基)
F-007	石橋供養塔	"柳町	"		
F-008	庚申塔	"時雨	青面金剛	宝暦5年(1755)	日待供養塔(1基)、庚申塔(1基)
F-009	月待供養塔	" "	"	9年(1759)	

遺跡番号	名 称	所在地	種 別	時 代	備 考
F-010	庚申塔	細江坪根	猿田彦庚申他	天明3年(1783)～ 天保2年(1855)	猿田彦庚申(6基)
F-011	地蔵供養塔	" "	一体地蔵		
F-012	庚申塔	" "		元文5年(1740)～ 延喜2年(45)	庚申塔(3基)
F-013	"	" "	猿田彦塔		石碑型庚申塔(1基)石橋供養塔
F-014	"	細江字中福良		元禄13年(1700)～ 享保15年(30)	庚申刻字(2基),石碑(3基),石柱(1基)
F-015	月待供養塔	" "	月輪命銘他	宝永2年(1705)～ 昭和10年	庚申刻字(3基)方面金剛(1基),弘法大師(2基), 一体地蔵(1基)石碑(1基),石燈(1基),
F-016	庚申塔	細江			
F-017	一字一石塔	"	角柱型	文久2年(1862)	
F-018	馬場観音	"	帽子型		
F-019	五輪塔	" "	五輪塔群		
F-020	庚申塔	" 門口	庚申刻字他	宝曆4年(1754)～ 天明7年(1787)	庚申塔(1基)
F-021	日待供養塔	" 彦野	天照祭神他	文化6年(1809)	庚申刻字塔(1基)石塔(1基)
F-022	水神塔	" "	石祠型	宝曆2年(1752)	石輪,庚申塔(2基)
F-023	月待供養塔	" (金宮神社)	自然石他	享保10年(1725)～ 明治28年(1895)	月待供養塔(2基)地蔵供養塔(1基), 庚申塔(2基)石燈籠(1基),
F-024	田ノ神塔	浮田字架下	農民像型他	明和7年(1770)	田ノ神塔(1基)
F-025	月待供養塔	" "	月天子他	享保17年(1732)～ 明和7年(1770)	月天子(3基),庚申塔(1基),
F-026	観世音菩薩	" 塚田	石碑型		
F-027	月待供養塔	長嶺字黒ノ坪	月天子他	寛延元年(1748)～ 寛永4年(92)	庚申塔,月天子
F-028	山ノ神塔	" 南ヶ崎	石祠型		
F-029	地神塔	" "	上公神	大正3年11月29日	
F-030	田ノ神塔	" "	石祠		
F-031	"	" "	神宮像型	寛延11年(1779)	
F-032	石 輪	長嶺(長嶺神社 参り口)	六地蔵型		
F-033	田ノ神塔	深坪	農民像型	明治33年(1900)	
F-034	馬頭観音	長畑	石祠型	明治42年	
F-035	石 輪	浮田内ノ丸	大地蔵塔		月天子(1基)
F-036	五輪塔	浮田神社	石 塔	明治34年～昭和15 年	水神塔(1基)石祠(1基)田ノ神塔(2 基)
F-037	田ノ神塔	浮田	農民像型		
F-038	月待供養塔	浮田字余り田	二十三夜 月天子	元禄8年(1695)	田ノ神塔(1基)

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	備考
F-039	五輪塔	浮田字余り田	石塔	永正10年(1513)～ 永祿5年(1562)	板碑(1基) 題目塔(1基) 立塔(1基)
F-040	月待供養塔	"	十三夜塔	宝永2年(1702)	
F-041	庚申塔	生目妙見寺		享保14年(1792)～ 寛延3年(1750)	月天子(1基)
F-042	石塔群	" 阿智野		江戸～明治	弘化御養塔(1基) 馬頭観音(1基) 月天子(7基) 庚申塔(4基) 石碑(3基) 石塔(2基) 渡船寺(1基)
F-043	"	"		"	馬頭観音(1基) 木尊(1基) 月天子(3基) 月御尊(1基) 庚申塔(1基) 立塔(1基) 万葉塔(1基) 田ノ神(1基)
F-044	墓塔	生目字小村		大正6年(1917)	墓塔(3基)
F-045	地藏菩薩	"	石碑型	天保8年(1837)	
F-046	石塔	"		江戸時代	墓塔(2基) 板碑(2基) 満盛塔(1基)
F-047	供養塔	"		明治6年(1879)	月天子(1基)
F-048	石碑	生目字前田		文政7年(1824)～ 明治18年	石碑(2基) 弘坊供養塔(1基) 庚申塔(2基)
F-049	石仏石塔	生目字人村	月天子	宝曆3年(1753)～ 明治6年(1879)	
F-050	墓塔	浮田字古城		宝永4年(1707)	
F-051	水神供養塔	"	水神様	天保11年(1840)	
F-052	月待供養塔	"	十三夜様		
F-053	"	浮田字浮田	月天子	正徳元年(1711)	
F-054	石仏	富吉字山下		文化年間 (1804～1817)	石仏(8基) 馬頭観音(1基) 庚申塔(1基)
F-055	水神供養塔	富吉			
F-056	月待供養塔	"	月天子		
F-057	石燈	" 字垂水	六地藏塔	寛延4年(1714)～ 明治38年	石燈籠(1基) 月天子(1基) 庚申塔(1基) 地神塔(1基)
F-058	月待供養塔	"	月天子	天保10年(1839)	庚申塔(1基)
F-059	馬頭観音堂	富吉		寛政9年(1797)	庚申塔(1基) 石燈籠供養塔(1基)
F-060	石燈籠供養塔	"	石燈籠	天保3年(1832)	
F-061	月待供養塔	富吉字納島	月魂命	正徳2年(1712)～ 明治17年	月天子(8基) 石碑(3基) 庚申塔(1基) 手水鉢(1基)
F-062	"	"	月天子	安永9年(1780)～ 文化3年(1806)	月天子(1基)
F-063	石橋供養塔他	柏原北の道	石碑	貞享2年(1682)～ 文政2年(1819)	墓塔(2基) 庚申塔(1基) 地神塔(1基)
F-064	仁王像	跡江大畑	石仏	元禄12年(1699)～ 明治3年	月天子(3基) 字一石塔(1基) 墓塔
F-065	庚申刻	跡江字寺小路		宝曆14年(1764)～ 寛延4年(1792)	月天子(1基) 題目塔(1基)
F-066	農民型田ノ神	" 茶屋	田ノ神		
F-067	"	" 小松	"		

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	備考
F-068	農民型州ノ神	跡江字無田ノ上	田ノ神		
F-069		＊ 塚ノ前	石 仏	昭和14年3月	
F-070		＊ 内ノ丸		明治26年3月	
F-071	天 月 子	＊ 松ノ田			
F-072		＊ 黒田ノ上			
F-073	青面金剛像	＊		文政6年(1823)	
F-074	月 天 子	＊			
F-075	＊	＊			
F-076	石 碑 刻 字	跡江字椎原形	馬頭観音	昭和32年3月3日	
F-077	地 蔵 菩 薩	＊	地蔵菩薩	寛延3年(1791年)	
F-078	水 神 宮	＊	水 神 塔	大正2～3年	
F-079	石 祠	＊	＊		
F-080	庚 申 刻 字	＊	庚 申 塔	享保7(1727)～寛延8(1796)	
F-081	弘法大師像	＊	弘法供養 他		
F-082	石 幢	大字恒久字横町	大地蔵塔 他	明和7年(1770)～ 文政4年(1821)	庚申塔 馬頭観世音 石仏
F-083	庚 申 塔	＊ 鶴馬寄	庚申刻字 型 他	文化11年(1814)	石仏
F-084	＊	＊ 曾 井			庚申塔(1基)
F-085		古城町時雨			五輪塔(5基) 墓塔(1基) かくぞう様、 稲荷様
F-086	猿 田 彦	細江	石 塔		猿田彦(9基)
F-087	奉待二十三夜 供養塔	跡江三叉路	＊	安永6年(1777)～ 文化9年(1812)	月天子(3基)
F-088	飯 命 月 天 子	＊		寛延元年(1748)	飯命月天子(1基) 弁命待二十三夜供、 養塔(1基)、月読尊(1基)。
F-089	月待供養塔	跡江	○月天子	宝曆11年(1761)	
F-090	奉 待 庚 申	跡江三畝		文政6年(1823)	奉請庚申(2基)
F-091	庚 申 塔	跡江三畝西止		寛政10年(1798)	月天子 奉待庚申 庚申尊座
F-092	庚 申 宮ノ馬場			安永2年(1773)	飯命月天子(2基)、庚申(1基)
F-093	飯 命 月 天 子	飯屋		宝曆12年(1762)	(飯) 命月天子(1基)
F-094	＊	坂ノ下			待月()、飯命月天子 月天子
F-095	＊	＊		明治35年	月天子(1基)
F-096	月 天 子	茶屋		天明4年(1785)～ 慶応4年(1868)	月天子(1基) 飯命天子(2基) 月 天子(1基) 奉待月(天)子(1基) サツ月天子(1基)

道番号	名称	所在地	種別	時代	備考
F-097	伊弉諾寺石塔群	古城町門前 6695			
F-098	本勝寺石塔群	大字浮田 437			
F-099	一丁田の石塔群	生目一丁田			
F-100	未香寺跡石塔群	生目塚元			
F-101	庚申塔	大字恒久曾井	青面金剛		
F-102	馬頭観世音	"			
F-103	板碑	"	像型		二尊、三尊仏教碑、五輪塔、他
F-104	石幢	"	六地藏塔	永正18年(1521)	2基

7. 祠(祠堂)等

道番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
G-001	稻荷神社	小松字高松	祠堂				
G-002	大師堂	"	"				
G-003	観音堂	小松字元町	"				
G-004	御大師様	跡江字上ノ坂	"				
G-005	大師堂	" 坂ノ下	"				
G-006	地藏堂	跡江字坂屋	"				
G-007	観音堂	中富古字追内	"				
G-008	地藏堂	富吉字垂水	"				
G-009	犬講宮	"	"				
G-010	稻荷神社	"	"				
G-011	祇園様	富吉字とも追	"				
G-012	弁才天	" 納島	"				
G-013	阿弥陀様	柏原字丸山	"				
G-014	大師堂	" 懸ノ追	"				
G-015	地藏堂	" 北ノ追	"				
G-016	観音堂	細江	"				
G-017	薬師堂	細江字坪根	"				
G-018	阿弥陀堂	" 彦野	"				

遺跡番号	名称	所在地	種別	時代	旧番号	文献	備考
G-019	馬頭観音堂	細江字彦野	祠 堂				
G-020	稲荷大明神	"	"				
G-021	観音堂	長嶺字寺ノ下	"				
G-022	弥勒社	" 下中	"				
G-023	余り田の観音堂	浮田大字余り田	"				
G-024	一丁田の薬師堂	生日字一丁目	"				
G-025	地藏堂	細江字椎屋形	"				
G-026	薬師堂	古城町字時雨	"				
G-027	伊瀨福寺奥ノ院	"	"				
G-028	" 観音堂	" 字古城	"				
G-029	地藏堂	古城町寺ノ下	"				
G-030	"	下古城	"				
G-031	薬師堂	恒久字片平	"				
G-032	観音堂	田古字津原	"				
G-033	高野山遍照寺	太田2丁目1-19	"				
G-034	太田観音堂	太田3丁目	"				
G-035	観音堂	源藤町南田	"				
G-036	"	大塚町倉ノ下	"				

Ⅲ 主要遺跡概説

1. 曾井遺跡 (A-017) 大字恒久字曾井

古城町の古城，後藤寺追より東に続く丘陵（曾井城跡）の山裾のみかん山が開けており，このみかん山と，隣接する宅地に縄文時代の土器片が多数，見られた。かなり大きい破片が，民家の排水溝などに露出している。保存状態の良いものである。中期～後期ごろのもの。

2. 上ノ原遺跡 (A-022～A-028) 大字細江字上ノ原など

県道浮田・田野線を，市街地の南に横たわる山地に上りつめて清武町と境を接するところに時雨上，原地区がある。県道より東に広がる台地では，縄文土器片を採集することができた。現在の地表は，山を10m位地下げた結果であり，その際に土器片が見つかったということだった。旧地形の残っている，台地の北側の山林付近では比較的良好な状態の破片が表

採できる。早前期ごろのものである。県道より南西に広がる畑地では弥生土器片、須恵器片などもみられる。

3. 椎屋形遺跡 (A-030~A-032) 大字細江字椎屋形

時雨上、原地区から更に、清武町との境に沿って南西に上って行くと、椎屋形の台地が北に広がっている。あまり大きい破片はないが、縄文時代・弥生時代の土器片が散布している。

4. 下古城遺跡 (A-007~A-016) 古城町下古城

弥生時代後期～終末の土器片が多く見受けられる。古城川河川改修工事の折に完形品の壺(安国寺系)などが多く出土しており、また大將軍神社・古城公民館裏手の丘陵一帯で、かなり多量の破片を採した。土器の様相としては中間遺跡とほぼ同質で、有望な遺跡である。

5. 上屋敷遺跡 (A-041) 大字浮田字上屋敷

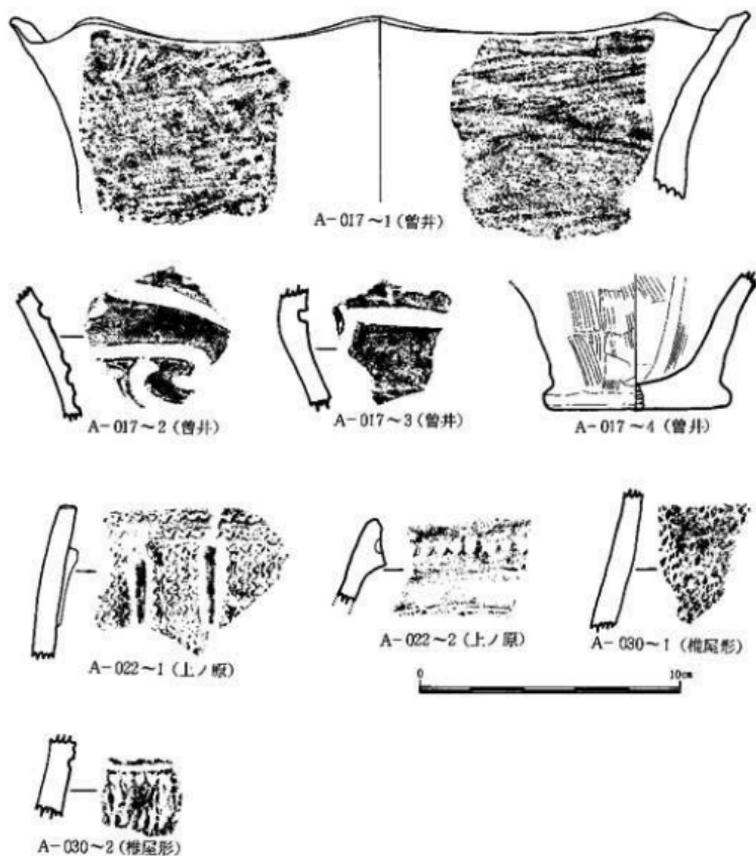
戦前から遺跡地として知られており、開墾の際に安国寺系の壺の完形品が見つかっている。丘陵の頂上付近に民家があるが、その周辺の畑地に破片が散布している。丘陵の西の裾の方でも若干みられるので、この丘陵全体を遺跡の範囲とみてよいだろう。

6. 高嶺遺跡 (A-044) 大字浮田字高嶺

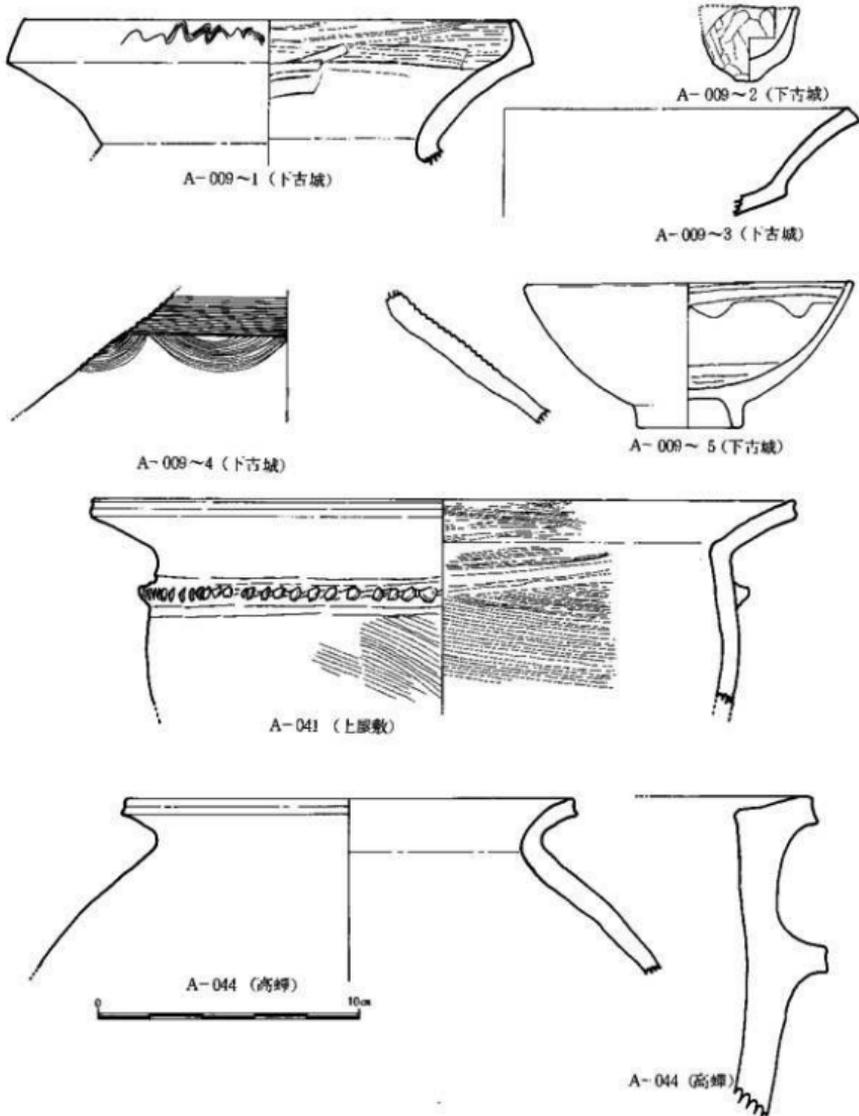
県道生目神社線より西側に、大谷川に突出する丘陵にひろがっている。ここでは、城跡としても知られるが、ほぼ同域で弥生中～後期の土器片を採することができる。又、古磁碗の破片も見つかっている。

7. 九日田遺跡 (A-040) 大字長嶺字九日田

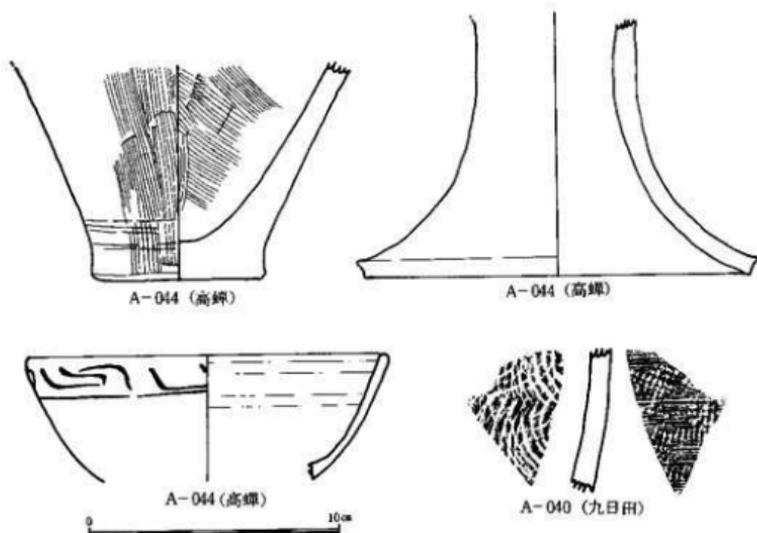
九日田池の東側に広がる畑地や、長嶺神社のある山の裾近くでは、弥生時代、古墳時代の土器片を小破片ながら採することができる。又、池の南東側のふちで、須恵器片を見つけた。地元の人によれば、池の東側の山林中に古墳が存在するということがあったが、確かめるにはいたらなかった。



第1図 表採遺物(織文土器)(曾井遺跡(A-017), 上ノ原(A-022), 椗屋形遺跡(A-030))



第2図 表採遺物(弥生土器、青磁)(下古城遺跡(A-009),上原敷遺跡(A-041),高坪遺跡(A-044))

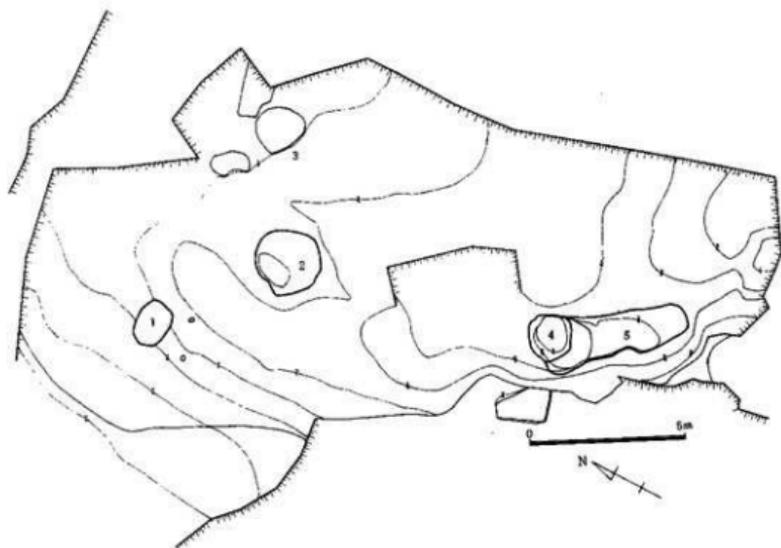


第3図 表採遺物(弥生土器、青磁、須恵器)(高碑遺跡(A-044)、九日田遺跡(A-040))

IV 中岡遺跡

1. 中岡遺跡の概要

遺跡は、北川内町字中岡にあって標高30mほどの山陵部分の両側に開かれた狭い窪地(広さ約370㎡)に営まれており、低地の水田面までは約20mの比高をもっている。遺跡の位置する地形は、西、北、東方向と山陵の斜面となり、南西方向にわずかに開かれた掃り鉢状を呈している。遺跡をとりまく斜面の基盤はシラス層によって形成されている。遺跡における土器包含状況は幅約6m、長さ約20mの細長い範囲内に集中し、北から南への傾斜、それに西から東に傾斜する傾斜面に堆積した状態にあり高位層に当たる12・13区では3層の包含層が見受けられ低位置となる5～8区では7層にわたる包含層を検出している。特に9～11区は東西・南北からの傾斜が強いところであり、土器の堆積にもかなり乱れを生じる状況を呈していた。遺跡内では北側傾斜面に土器溜めと思われる厚い土器の集積や、幅80cm、長さ1.2m、深さ80cmの長方形の掘り込み(井戸跡)や、平坦面になって直径約2m、高さ1mの粘土山が検出され、粘土はかなり精製されたものであった。また、平坦面ではブロック状に焼土面を検出することができた。一方、これらに続く西側低位置には西側からの自然傾斜面を切り取って壁をつくり、東側平坦面では一部粘土による土壁を作った幅1.5m、長さ約6m、深さ50cm内外の長楕円形状の焼成土坑が検出され、その北半において重複する形で直径1.5m、深さ約50cmの円形焼成土坑が検出されている。以上のような遺構検出からこの遺跡は土器製作焼成跡の性格が強く窺われる。



第4図 中岡遺跡平面図〔1. 井戸跡 2. 素材粘土山 3. 一番焼上面 4. 円形焼成土坑
5. 長方形焼成土坑〕

2. 中岡遺跡の弥生土器

〔1〕出土土器の整理方法

当遺跡出土の土器は接合復元されたもの、破片のままのものにわたって莫大な量にのぼる。そこでまず出土状態でほぼ安定した状態と判断される地区での堆積層を選定して各層別別に全器種を抽出し、これを基準として他地区の土器を判断する方法が適当であろうと考えられた。当遺跡は山裾に位置して土器の堆積する範囲だけでも高低差のはげしい地形であり、層位の顛倒している場合も考えられる状況であることを考慮したからである。そこで調査担当者に依頼して出土状態実測図および写真、さらに出土品のレベルを記入した断面図と照合しながらつぎの四地区の層位資料を選定してもらった。

- (A) 5～8区下層…堆積層の最下層にあたる。
- (B) 5～8区上層…堆積層の中位にあたる。
- (C) 9～11区上層…堆積層の最上層にあたる。
- (D) 12・13区下層…(A)に対応する同位層

この四地区の編年序列は(A)・(D)→(B)→(C)となるはずである。かくして上記4地区の土器を各器種にわたって抽出してセットを明らかにした上で各地区層別別土器を一括してそれぞれ各時期を代表する一型式と認定して、混入品の認められる他地区出土土器の時期判断に資することとした。

〔2〕5～8区下層土器

器種に壺・甕・高坏・鉢・脚付鉢・大形器台・ミニチュア土器などがある。なかでも壺形土器は豊富な内容を有してつぎのように細別することができる。

壺形土器

- I 長頸壺 (a・小形 b・大形)
- II 広口壺
- III 短頸直口壺
- IV 長頸壺 (a・長胴形 b・算盤形)
- V 算盤形壺
- VI (原初的) 複合口縁壺

つぎに高坏形土器は器形および系統から二種に分類できる。

- I 西瀬戸内系
- II 北～中九州系

ミニチュア土器はこれまで終末期以降に多くみられる素雑な小型手捏土器とは異り、やや大きく器形を忠実に写したものである点で大きく差違がみられる。器種に広口壺・長頸壺・甕・鉢・高坏(Ⅰ類系)がある。

〔3〕5～8区上層土器

器種に壺・甕・高坏・瓶・ミニチュア土器がある。ここでも壺形土器の種類につき四種がある。さきの下層土器からの系譜がたどられるので同じ分類を適用しておく。

- I 長胴壺
- II 広口壺
- IV 長頸壺
- VI 複合口縁壺

とくにⅡの胴部、Ⅳの胴部に櫛描波状文がみられるのは下層土器とは異なる大きな特色である。また好例に恵まれないがおそらくⅥの口縁外面にも櫛描波状文が登場しているであろうと考えられる。

高坏形土器は下層のⅠ類の系統に属するものだけである。

ミニチュア土器は下層のものよりやや小形で素雑となり丸底甕・甕・丸底鉢の種別がみられる。

〔4〕9～11区上層土器

器種に壺・甕・高坏・ミニチュア土器がある。壺形土器ではⅥ系統の複合口縁壺が主流を占め、櫛描波状文が最盛期を迎えた時期である。

- II 広口壺
- III 短頸直口壺
- VI 複合口縁壺

高坏形土器ではⅠ類系統が主流をなす。

ミニチュア土器にはⅠ類系統高坏がある。

(5) 12・13区下層土器

器種に壺・甕・高坏・器台がある。この地点土器の特色は壺形土器がすべて長頸壺で構成されており、胴部に鋭い稜を有する算盤形をなすものと、この簡略形と考えられる稜を消失させた長胴形がある。したがって壺形土器の内容はつぎのような3種となり、さらに各種とも胴部に熊本県免田式土器系統の重弧文を有する有文類と無文類に分けられる。これを要約すれば次表のようになる。

	a 算盤形短胴	b 算盤形長胴	c 長胴
有文	○	○	
無文	○	○	○

このうちa・b類有文壺はとくに他と区別して免田系帯形土器の名称を与えることができよう。無文a・b・c類はその垂式土器と考えられる。

壺形土器は上述三地区の土器と異なり、上胴部に刻目凸帯をめぐらしたもので、後期初～前半代に比定される中溝遺跡(佐上原町)の壺形土器⁽¹⁾からの系譜がたどられる資料である。

高坏形土器はⅠ類系統である。器台形土器は北～中九州系にひろくみられるものである。

(6) 中岡式土器の設定とその特性

以上、四地区の上器の概要を述べたところによって、当初予察したように

5～8区下層土器 }
12・13区下層土器 } → 5～8区上層土器→9～11区上層土器

の変遷序列が成立することが確定した。したがってこれら4グループの土器に対して、

中岡Ⅰ式土器 { A群 = 5～8区下層土器
 B群 = 12・13区下層土器

中岡Ⅱ式土器 = 5～8区上層土器

中岡Ⅲ式土器 = 9～11区上層土器

と仮称して標準資料として取扱うこととする。

中岡Ⅰ式土器A群は(原初的)複合口縁壺の口縁外側に西瀬戸内系の凹線文を施したものと、併列線刻文を施したものがあり、後期前半代から継承された要素がみられる。また高坏Ⅰ類、大形器台も西瀬戸内系である。高坏Ⅱ類は北九州の中期(須玖Ⅱ式)系に起源するもので、後期に下っても若干の変化をしながら盛行したもので、中九州では免田式土器の時期にみられる。脚付鉢も中九州系統であろう。算盤形壺の存在とあわせて中九州免田系土器群との交渉が考えられる。

中岡Ⅰ式土器B群は免田系有文壺とその系譜につながる土器群が集的に発見された点で注目すべきところであるが、さらに在り地系壺・西瀬戸内系高坏・北～中九州系器台が共存している興味深い。A群壺形土器中の算盤形壺と合せてこの種壺はⅡ式以降にはみられない。このこ

とは免田系土器群はⅠ式土器の時期にのみ特定されることを意味している。

中間Ⅱ式土器は基本的にⅠ式土器の各器種を継承して展開されるのであるが、Ⅰ式土器にみられた北～中九州系の要素はなくなり、かわって複合口縁壺と櫛描波状文が出現して、西瀬戸内～東九州系統の様相が現われてくるところに特色がある。また長胴壺の表面に原始絵画の籠描きが流行するものこの時期である。その始まりはすでにⅠ式土器の長胴壺にも認められた。

中間Ⅲ式土器は複合口縁壺と櫛描波状文が主流を占めることで特色づけられ、東九州の安国寺遺跡⁽²⁾（大分県）系土器でほとんどおおいわた感がある。この土器群のなかには、すでに土師器段階にまで踏みこんでいるのではないかと思われる土器も若干含まれている可能性があり、今後の詳細な検討がのぞまれる。

かくして中間Ⅰ式土器の上限は後期中頃よりさかのぼらず、Ⅲ式土器は終末期に比定される。したがって中間Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器は後期中頃以降終末期を3期に区分する結果が得られたことになる。これは現段階で宮崎平野におけるこの時期を最も細分した山中悦雄氏の編年案のⅥ・Ⅶ・Ⅷ期にはほぼ対応するものとなろう。⁽¹⁾

なお中間遺跡で注目された土器製作関係遺構の時期はⅠ式土器群で示されることになる。

〔7〕のこされた課題

以上で、本遺跡出土土器の分類、編年という当面の課題は一応終了、概要をうかがうことができた。しかしなお将来にのこされた問題もある。その一は、中間Ⅰ式土器は将来さらに新たに二期に細分される可能性が予測される。これはさらに同時期の他遺跡資料をさがして検討する作業を経なければならない。したがって将来Ⅰa式・Ⅰb式を設定できることを指摘しておく。

その二はⅠ式B群土器の内容が明らかになり、時期が特定できたことによって、同じく免田系土器を出土している西諸県郡野尻町・大萩遺跡⁽³⁾の場合も再検討がのぞまれる。

その三は今回設定できた「中間式土器」の流通圏を追跡することである。これによってその分布圏が明らかにされるはずである。（1984・3・2稿）

本稿は2月27・28日の両日、宮崎市教委の野間重孝、荒武麗子氏らの援助をえて検討した結果を求められるままに摘記したものである。したがって将来本遺跡の全資料を詳細に検討した際には若干の修正を要するかも知れないが、限られた短時日のなかで大要は把握できたものと考えている。上記両氏のほか、当日茂山慶、石川悦雄（旧姓山中）両氏にも要請して立会っていただいた。あわせて感謝申し上げる次第である。

註

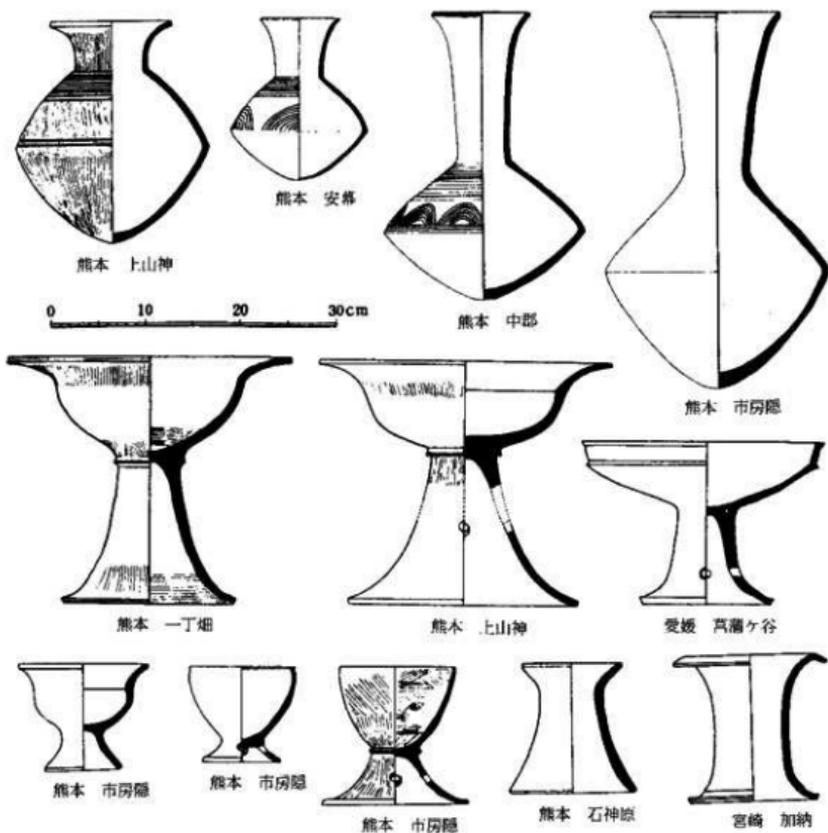
- (1) 田中茂「宮崎県出土の円形袋状口縁壺形土器について」（宮崎県総合博物館「研究紀要」3）1975

山中悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案—素描—」（宮崎県総合博物館「研究紀要」8）1983

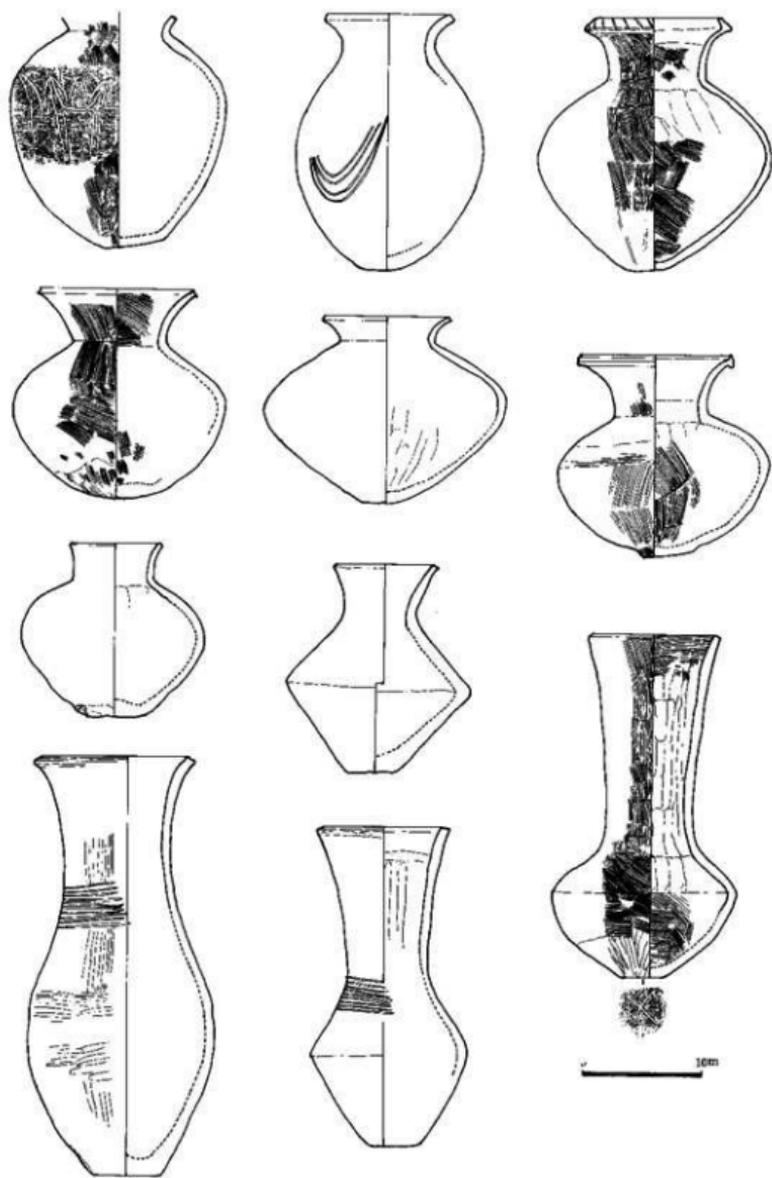
- (2) 九州総合文化研究所編「大分県国東町安国寺弥生式遺蹟の調査」1958

(3) 石川恒太郎・田中茂・茂山護ほか『大秋道跡』(1)・(2) 1974~75

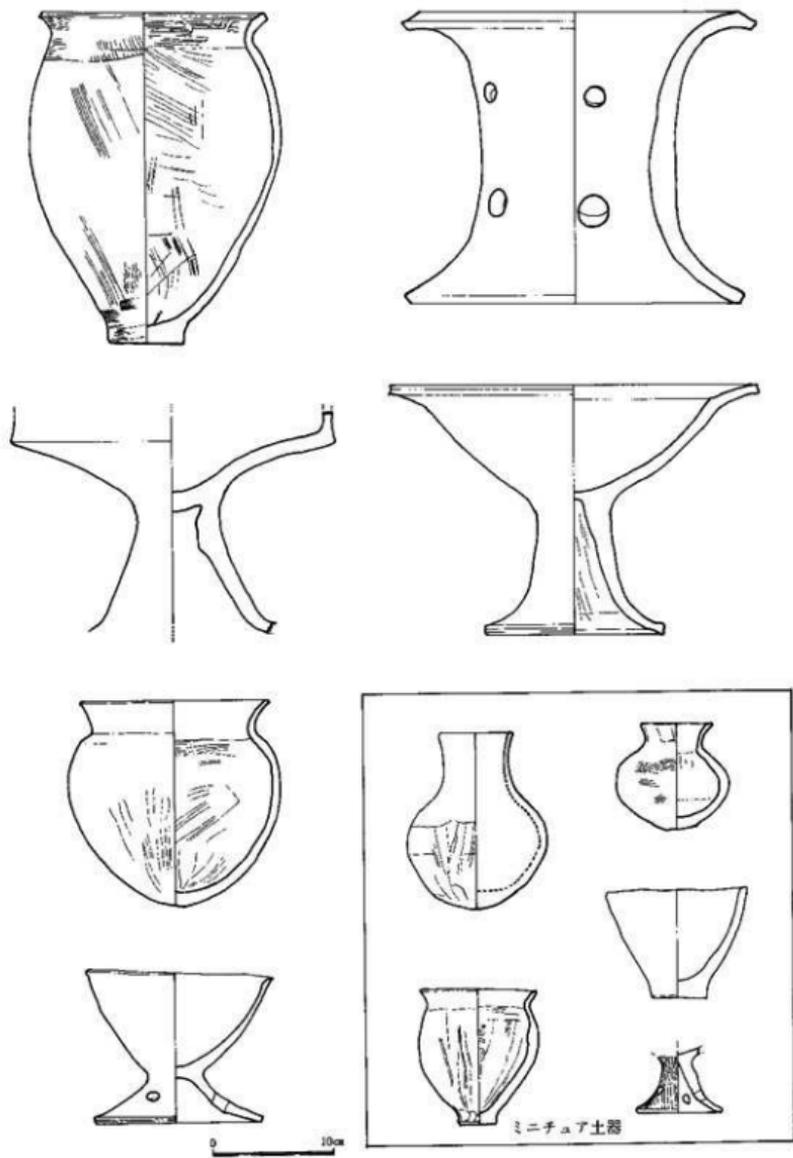
(4) 小田富士雄・真野和夫『東九州Ⅰ(『三世紀の考古学』下巻) 1983



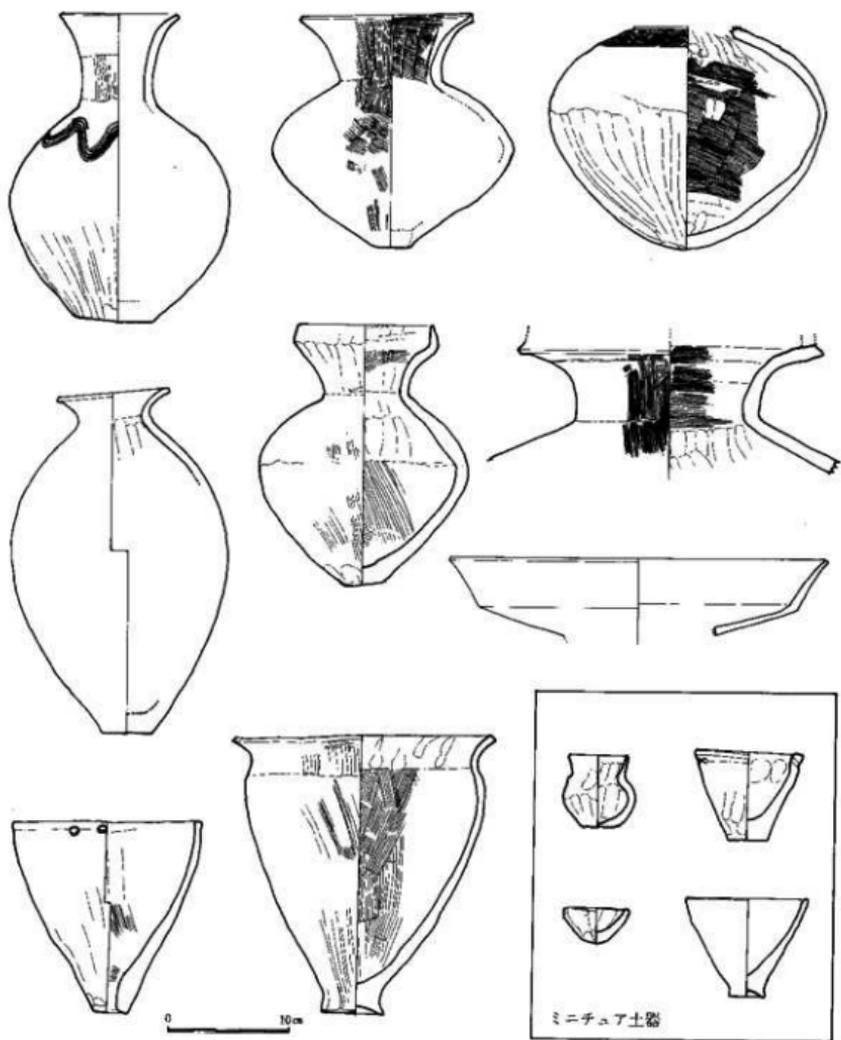
第5図 中岡I式土器参考資料



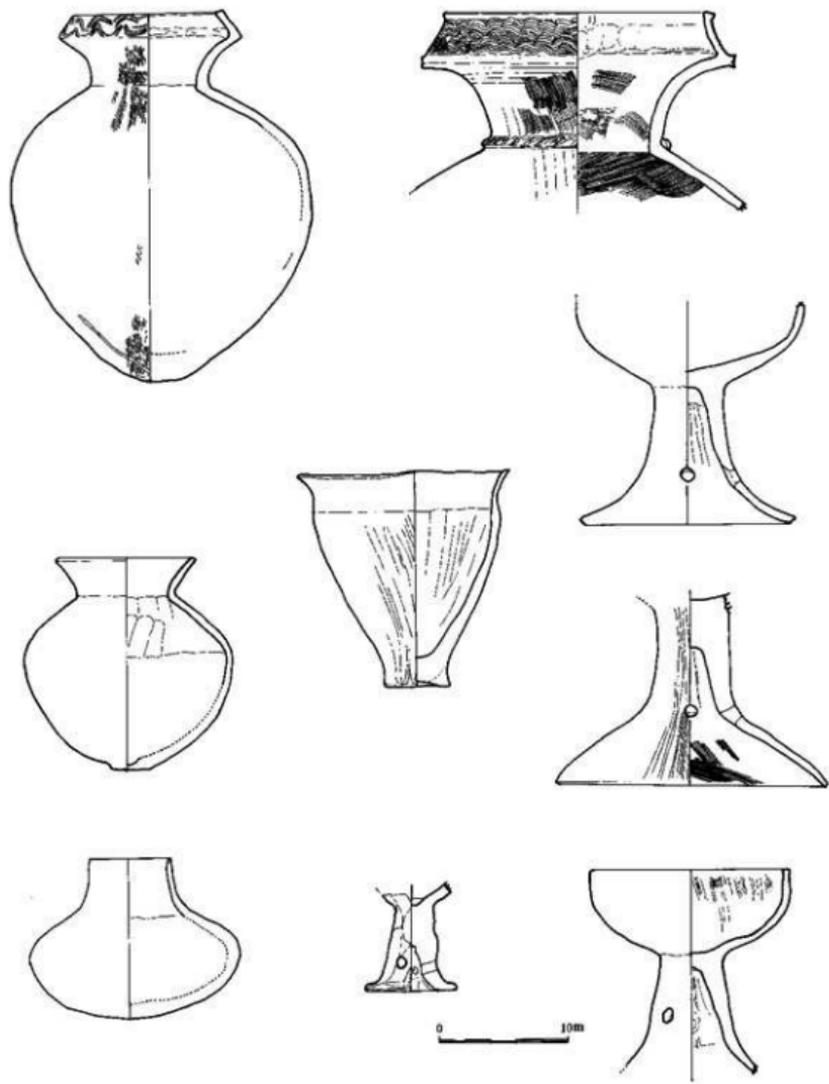
第6图 中国遗址出土十器(5~8区下层十器)



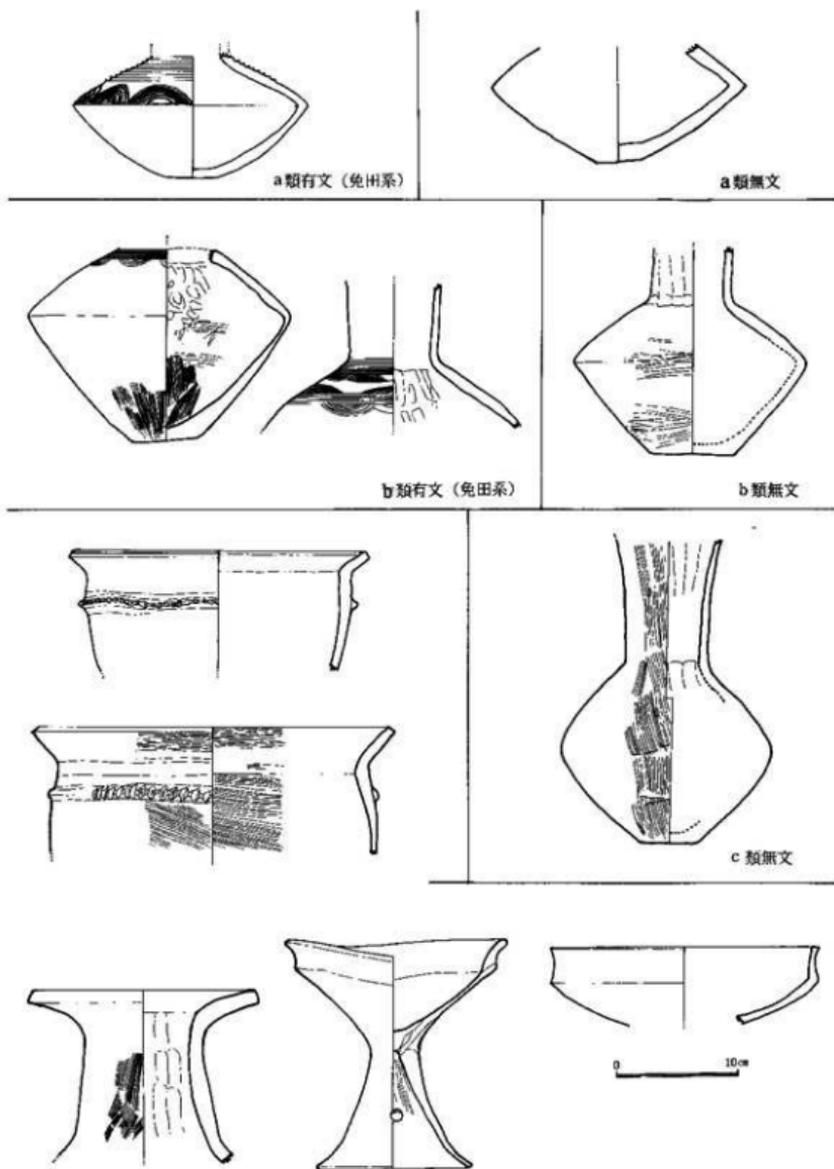
第7図 中阿道峠山上土器 (5~8区下層土器(2))



第8図 中尾遺跡出土土器（5・8区上層土器）



第9图 中區遼陽出土土器〔9~11区上層土器〕



第10圖 中間遺跡出土土器 (12・13<下層土器)

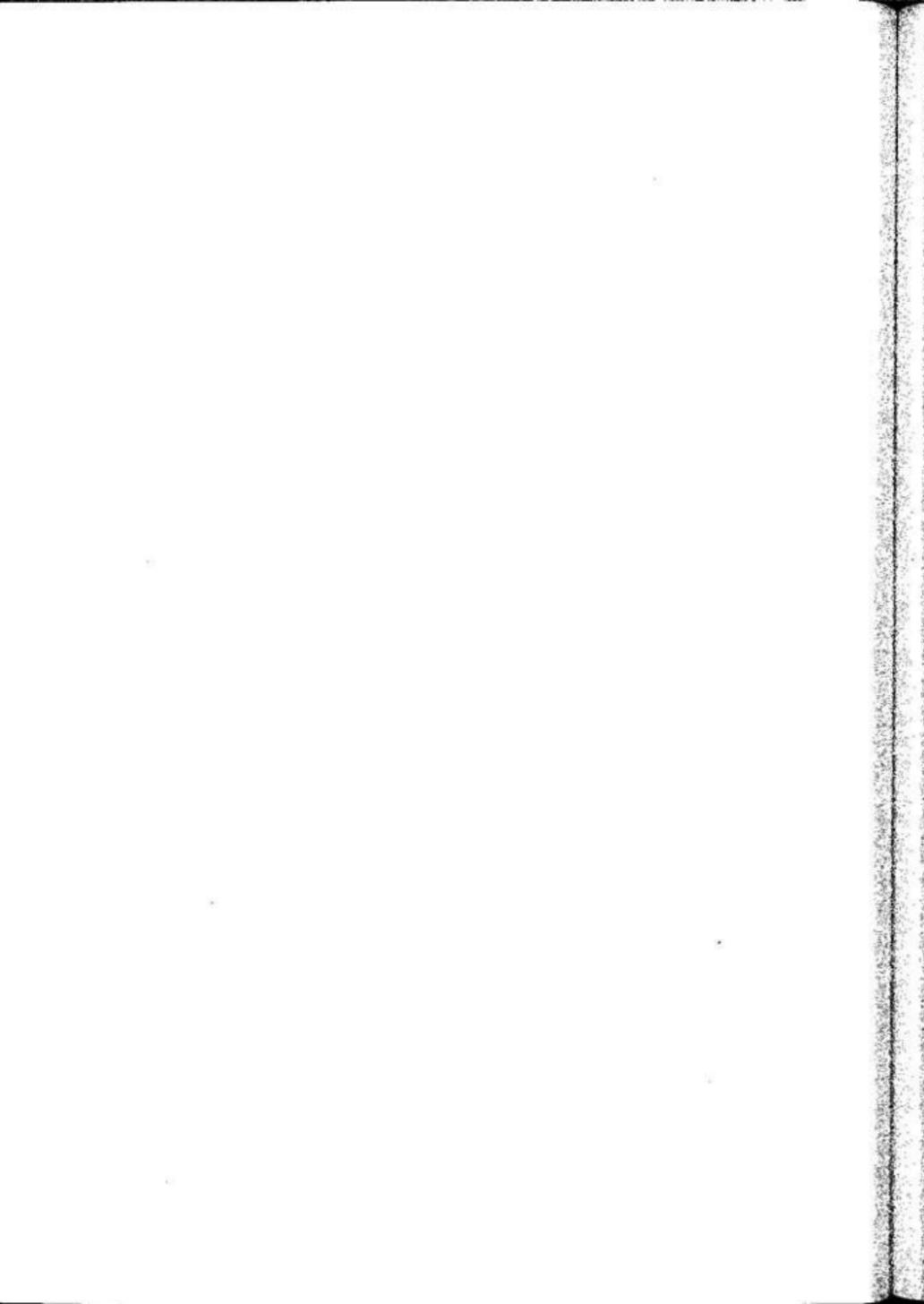
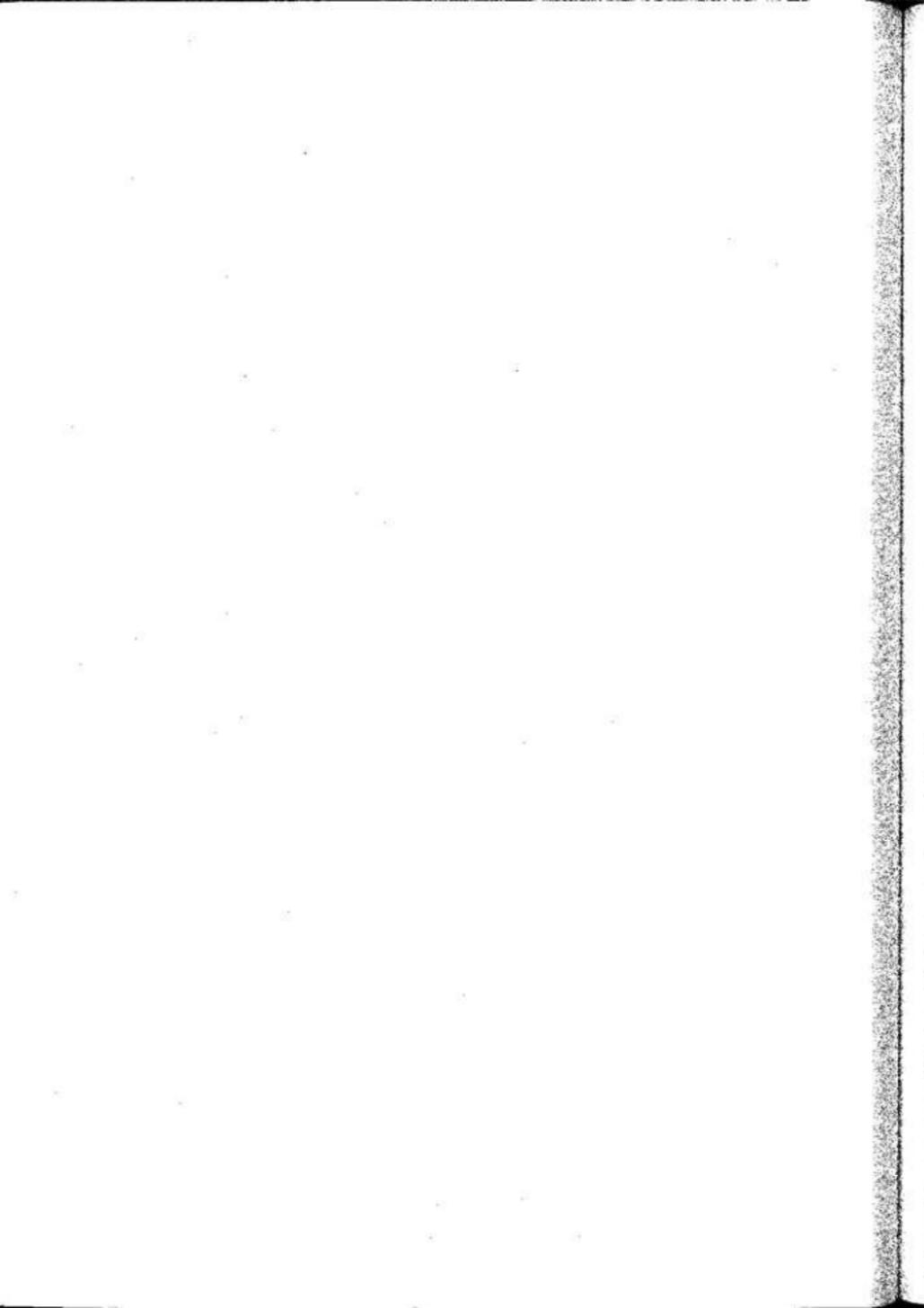
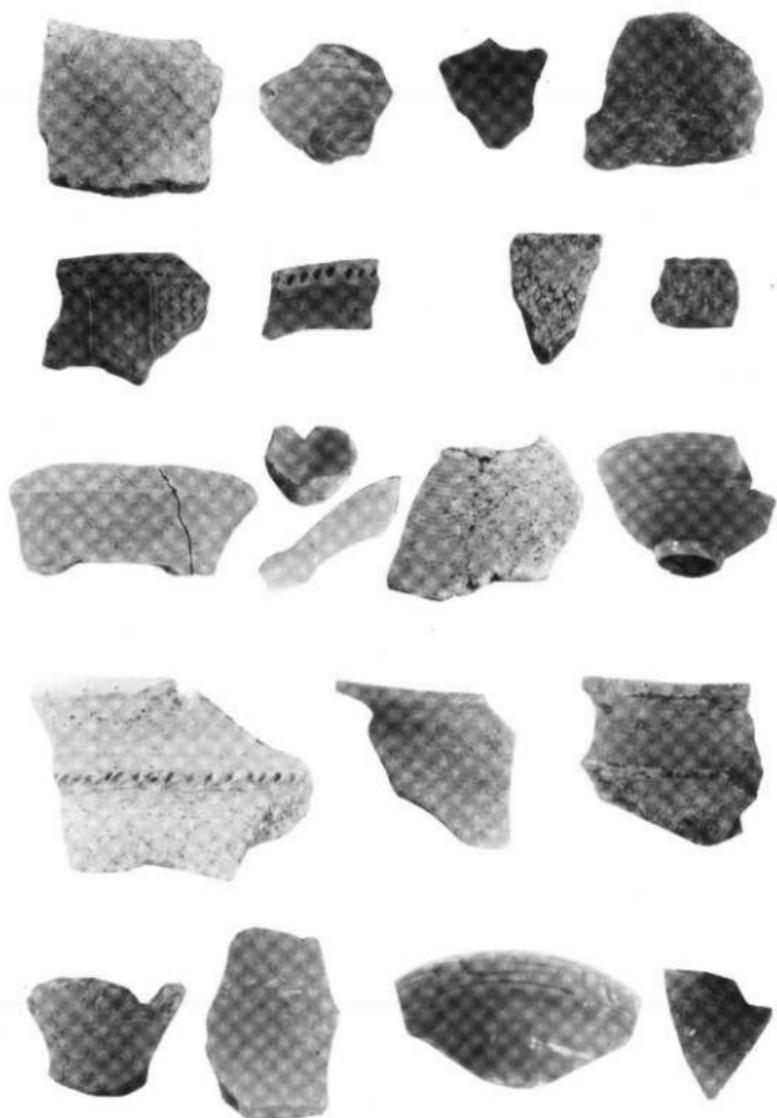
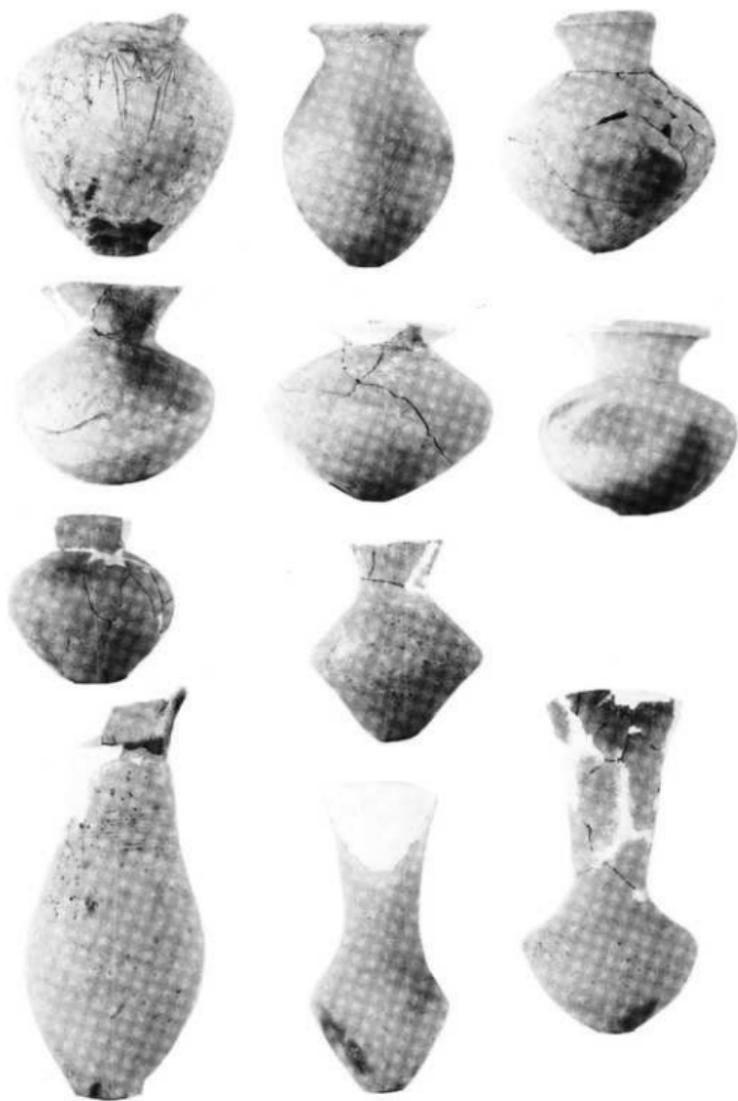


图 版





图版 1. 表採遺物



图版 2. 中阿遗址出土土器〔5~8区下層土器(1)〕



图版 3. 中阿遗址出土土器 (5~8区下层土器(2))



图版 4. 中间遗址出土土器 (5~8区上层土器)



图版 5. 中岡遺跡出土土器（9～11区上層土器）

宮 崎 市

遺跡等詳細分布調査報告書

I

(江南・大淀川西部地区)

編集・発行 宮崎市教育委員会

印刷 株式会社 宮崎南印刷

宮崎市大字田吉 350の1

宮崎市遺跡分布地図 (江南・大淀川西部地区)

昭和59年3月

宮崎市教育委員会社会教育課

凡例

- 遺跡地
- A 遺物散布地、集落跡、墓地等
- B 古墳、古墳群
- C 生産に関する遺跡(水田跡、窯跡等)
- D 城、館跡
- E 寺、社
- F 石碑、石造物
- G 祠堂

生目台住宅団地

